戦後８０年に祖父の話を聞いて

中沢中学校　五十嵐　育人

ニュースを見ていたら、「今年は戦後８０年」という言葉が聞こえた。２０２５年は、大平洋戦争の終結から８０年の節目の年だ。

僕の祖父は、今年で８０歳になる。戦争が終わった１９４５年は祖父が生まれた年だ。父は８月１５日より後に生まれているので、「戦後生まれ」ということになる。戦争中はこの世に生まれていなかったが、戦争中に曾祖母のお腹の中にいたと以前に母から聞いていた。

「ひいおばあさんは、おじいちゃんの入った大きなお腹で、空襲から逃げたんだよ。」と祖父から聞いて、僕は祖父が幼い頃から今まで住んでいる平塚に空襲があったことに驚いた。調べてみると、平塚空襲は大平洋戦争末期の１９４５年の７月、米軍が平塚市に対して行ったＢ２９爆撃機による空襲で、投下された焼夷弾は約４４万本、消失した家屋は約８，０００戸、死者は３００人以上、その他にも多くの負傷者など多くの被害を出したと知った。僕の住む伊勢原のすぐ近くで、こんな大きな空襲があったなんて知らなかった。

祖父はリビングの椅子に腰掛けながら、今祖父が座っているあたりに昔、竹やぶがあって、そこに穴を掘って作った防空壕があったことを教えてくれた。祖父の家に今は竹やぶはない。リビングの椅子のあたりに、戦争中、防空壕があったなんて、信じられない。戦後もしばらく防空壕は残っていたので、祖父も防空壕でのことはよく知っていた。４、５人が入れるくらいの大きさの家族用の防空壕で、戦争中はどこの家にもあったそうだ。空襲警報がでたときだけそこに入ること、空襲警報は夜中に出ることもあってそんなときは跳び起きて防空壕に入ることなど、祖父が両親から聞いたという話を僕は聞いた。曾祖母のお腹が大きくなって祖父の出産が迫ってくると、「赤ん坊を産むときは防空壕に布団を持っていこう」などと話していたそうだ。

そんなことを話している頃、空襲があった。

お腹に祖父を身ごもっている曾祖母が厚木の実家に帰っていると平塚方面に空襲で真っ赤に燃えているのが見えたそうだ。曾祖母は家族が心配になり、空襲警報が出ている中、夜の道を自転車に乗って平塚の家まで帰った。夜道で真っ暗だったので、途中で土手を転がり落ち、川に落ちてしまったが、何とか這い上がり、空襲から逃げながら家までついたそうだ。幸い家族は無事だったが、川に落ちた際にお腹の中にいた祖父はへその緒が巻き付いてしまったらしい。その後、終戦となり、曾祖母は祖父を出産することになったが、祖父はへその緒が巻き付いてしまったせいで、窒息して仮死状態で生まれたそうだ。鳴き声もあげない赤ん坊に、産婆さんが驚いて、冷たい水と熱いお湯を交互に掛けて刺激し、ようやく息を吹き返したということだ。

僕は夢中になって祖父の話を聞いていた。戦争の話は、これまでに本などで読んだことはあったが、自分の曾祖母や祖父に関わる話を初めて聞いて、より身近に感じると同時に、怖さを感じていた。空襲から曾祖母が逃げ切れなかったから祖父も生まれていなかっただろう。そして、いつ空襲が来るかわからない生活を想像すると、今、何の心配もなく、ご飯を食べたり眠ったり学校へ行ったりできることの有り難さと、「平和」であることの幸せさが感じられた。

僕が祖父から聞いた話は、曾祖父母から伝え聞いた話だ。戦争を体験した大正生まれの曾祖父や曾祖母は僕が生まれる前に亡くなってしまったけれど、僕は会って、直接話を聞いてみたかったと思う。戦争の話は本から知ることもできるが、直接話を聞くことでより戦争の悲惨さや、平和の有り難みや尊さを知ることができると思う。戦後８０年が経って、戦争を体験している人は高齢になり、近い将来ゼロになってしまう。これからも機会があったら、ぜひ戦争の体験を聞いてみたい。